

# IMPERIAL JAPANESE ARMY ARTILLERY TYPE 41 75 mm Mountain Gun “Mountain Artillery Regiment”

帝国陸軍

1/35 スケール プラモデル®

## 四一式山砲 [山砲兵]

JOY KITS LABO  
**Finemolds**®

Kit No.  
FM38

実物解説 組立説明は3ページより  
※当解説書の無断転載を禁じます。

「山砲」とは、山岳地帯や不整地など通常火砲が行動できない地形でも運用すべく、分解搬送を可能として迅速な機動展開能力を有する火砲である。

陸軍は日露戦争を終えた後、当時の主力山砲である三十一年式速射山砲の射程不足を改善する必要性を感じていた。同砲は砲身後坐機能を持たず、一発撃つごとに大砲自体が後退するために、実用発射速度も3発/分と遅いことも問題であった。このため新式山砲の開発を緊急の課題とし、陸軍技術審査部は審査官島川文八郎砲兵大佐にこれを命じた。この新式山砲の条件は、1馬あたりの最大負担量の制限、分解組立の部品数を増やさず操作数を減らす。夜間不整地においても駄載(ださい:馬への搭載)、卸下(しゃか:荷おろし)が容易におこなえる形状の考慮や砲手数の制限など、制約の多いものであった。

明治39年(1906)12月28日付の「参第231号」ならびに明治40年8月7日付「参第462号」により、それぞれ甲号・乙号の山砲が試製を認可された。両砲は日本独自の設計による砲身後坐式火砲であり、試製砲は明治42年2月に竣工した。陸軍技術審査部を中心に試験委員会を設けて、4月15日から約3週間で試験行軍、1週間の射撃試験を経て実用に耐えうるかを審査された。甲号・乙号ともに発射時の安定性に問題があるものの、威力と運動性は十分に要求を満たすと認められた。結果として、乙号を若干上回る性能を有する甲号に修正を加え、これを「四一式山砲」と命名。明治43年6月正式制定を上申し翌44年12月1日に制定発布された。

四一式山砲は三十一年式山砲に比べて発射速度や最大射程の向上が見られた。三十一年式山砲の射程距離は最大4,600mにとどまっていたが、四一式山砲では最大6,500mに伸び、実用発射速度も毎分10発から12発となる。さらに四一式山砲は砲身後坐式を採用

したことで発射時の火砲位置が動かず、より精密な射撃が可能となった(三十一年式山砲は前述の通り射撃時に砲自体が後退するため、射撃位置を保持しにくく修正射撃が困難であった)。

また四一式山砲は火砲としての射撃操作も容易であったという。山砲の特性である分解搬送もよく考慮され、分解後の駄載や後の砲組立も容易、組み立てた状態の砲も馬1頭ないし2頭で輓曳可能であった。

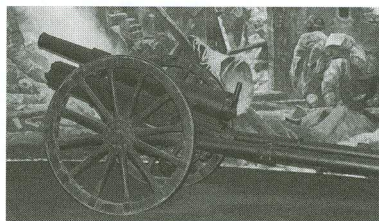
山地での運用では平坦な陣地が得られにくく、また砲自体の重量や部品数が増すことは敬遠される。四一式山砲では開脚式の砲架を採用せずY型(閉)脚を採用し砲架も円筒パイプを用いて強度確保と重量軽減を考慮した。砲架後部には砲固定のための駐鋤(地面に突き刺し砲を固定する)が付けられた。

四一式山砲は登場時、師団砲兵(当事の陸軍では歩兵師団の隷下を意味する)である山砲兵連隊に配備された。1個連隊は3個大隊で構成され計36門の山砲を保有した。

大正3年(1914)から始まる第1次世界大戦で、中国大陸におけるドイツの租借地・青島を第18師団が攻略した。所属する独立山砲兵中隊が6門をもって参加したのが四一式山砲の初陣で、大正7年8月から始まるシベリア出兵

にも使用され、高地や森林での戦いにも威力を発揮した。

昭和に入ってからは6年の満州事変、7年の第1次上海事変をはじめ支那事変そしてノモンハン事件などにおいて、歩兵支援に欠かせぬ火砲となっていた。



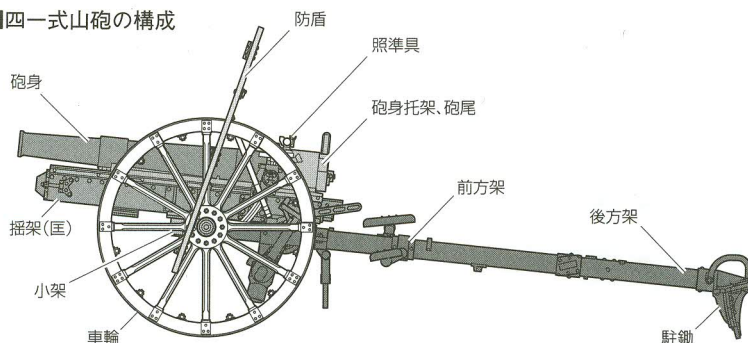
昭和10年から製造/配備が始まる九四式山砲へと徐々に置き換えられるが、大東亜戦争終了まで四一式山砲を装備する部隊も少なくなかった。また歩兵連隊直轄の支援火砲として仕様を変更し、昭和11年以降も終戦まで四一式山砲の生産は続けられた。

大東亜戦争においてもジャングルや人跡未踏の熱帯地域で分解搬送ができる山砲は、期待される支援砲兵であった。その使い勝手の良さで中国大陸から南方の戦場を始めすべての場所で終戦まで重用された。

#### ●参考文献:

日本陸軍の火砲 野砲 山砲 佐山二郎 著/光人社月刊グラウンドパワー 2008年11月号、  
同 2013年2月号/ガリレオ出版  
日本の歩兵火器 中西立太 著/大日本絵画

#### ■四一式山砲の構成



四一式山砲は駄載または臂力(人力)で運搬できるよう分解できた。その構成は「防盾」「揺架(匡)」「砲身」「小架」「車輪」「砲架(前方架・後方架・駐鋤)」に分けられ、それぞれ6頭の馬に分載された。基本的に各部重量はそれぞれ100kg以内となるように設定され、別に照準具は専用の照準具箱にまとめ弾薬箱とともに駄載される。馬が行けない地形では人力にて砲を搬送することから、当時の山砲兵は「断崖絶壁や泥濘湿地、大密林も山砲の前進を阻めない」と意気軒昂だった。

